



Volunteer network

主任神父様・信徒会長様・教区ボランティア・ネットワークの皆様

5年半の任期を終えて帰国しました。
「宝物」を分かち合いたい…



カンボジアの人達と『共に生きる』

2005年に、JLMM（日本カトリック信徒宣教者会）からカンボジアという国へ派遣され、約5年半の任期を終えて、2ヶ月前に日本へ帰国しました。現地では、識字教育や栄養改善、保健衛生、母子保健、浄水事業、病人支援活動などを通して、貧しい住民達が人間らしく生きられるようになるためのお手伝いをさせてもらって来ました。



聖木曜日 カンボジアの洗足式
“仕え合う喜び”

信者はみんな、だれでも、老若男女問わず、子供達も、イスに座って足を洗ってもらったり、足を洗ったりします。貧しくされた人達が、互いに仕えあっている方がふさわしいということで、はじめられたそうです。小さい子供の姿は、すごく微笑ましいです。

JLMMでの派遣は、青年海外協力隊のような海外ボランティア派遣とは違い、日本の教会から現地の教会へ派遣されるという、教会ベースでの派遣です。現地で行う活動も、開発の手法を用い、プロジェクトベースで行なっていますが、それは手段に過ぎず、目的は目に見える成果や発展ではありません。私は、『共に生きる』ことを目的として活動を行ってきたのです。

アフガニスタンにランドセルを贈ろう！ プロジェクト 目標達成！
ランドセル150個は、新潟 → 横浜港 → パキスタンの港 → トラックに積み替えて、陸路アフガニスタンへ運ばれます。ご協力ありがとうございました。青山教会（新潟市）

新潟教区ボランティア・ネットワーク 教区本部 大瀧浩一 窓口 佐久間香子

共に生きる。それは、言葉や文化、習慣の違う世界で、異質なものと出会い、その中で自分が変わられる体験です。

私は5年半のカンボジアでの生活の中で、たくさんの超えられない壁や受け入れられない物事にぶつかりました。その度に、もどかしさを感じたり、めげたり、涙したり、憤ったりしました。そして、その悩みの多くを、解決することは出来ませんでした。いつも結局、無力感に打ちのめされるだけです。ですが、そんな何も出来ない自分の『弱さ』を通じて、現地の人と共に生きることが出来ました。これが、私のカンボジアでの宣教の成果だと、胸を張っていうことが出来ます。



母子保健プログラム

お母さん達へのワークショップ
「いのち」を守り、育むために…

私が、一生忘れられないであろう体験があります。それは、ある赤ちゃんの死です。
私のところに、あるお母さんが「私の赤ちゃんを助けて欲しい」と助けを求めに来ました。その赤ちゃんを車で搬送したのですが、途中でその赤ちゃんは亡くなってしまいました。結局私は、その赤ちゃんのために何もしてあげられなかったのですが、赤ちゃんのお母さんは私に、「ありがとう」と言ってくれました。私に付き添い、一生懸命になってくれて、ありがとう、と。
この時私は、現地の人達が持つ、とてつもなく大きな愛に触れ、癒されました。人間の業を超えた、神の愛の大きさを感じました。

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。
力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。
だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、
むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

(コリントの信徒への手紙二 / 12 章 9 節)



水浴びプログラム&耳掃除

湖で泳いだ後は、耳掃除

中耳炎などの感染症を防ぐためですが、耳掃除の習慣づけの意味もあります。

何も出来ない私。その弱さを通して、私は現地と人と苦楽を共にして生きることが出来ました。その体験は、何事にも代えがたい、私の宝物です。現在日本へ帰国し、社会で働いている私は、その宝物を多くの人と分かち合っていかなければならないと思っています。それが、私の派遣を支えてくれた多くの方々への恩返しであるし、私を受け入れ、共に生きてくれた現地の人達への恩返しにもなると思います。



現地の人達とお食事

「アンコール・ビール」というカンボジア国産のビールがおいしいです。
一本 50 セント（40 円くらい）と、安いです。

日本の社会にも、様々なチャレンジがあります。その中で自分はどれだけ自分を他者のために捧げて生きていくことが出来るのでしょうか？日本で私に与えられた使命、召命を生きていきたいと思えます。

米沢教会 高橋真也

◆ 点訳ボランティアを紹介します。（新潟教区点訳チーム）

主なメンバーは、3名。一人は新潟市、二人は山形市に住んでいます。
現代の点訳はパソコンを用い、メール連絡なので、遠距離でもチームを組むことが可能なのです。
パソコン中級（点訳は初心者）の協力者が数名、原文のチェック等を受け持ってくれます。

前ロゴス点字図書館の館長さんに、雑誌の点訳を頼まれた時は、びっくり、ドッキリ。
毎号、点訳を送るたびに、ありがとう、と明るい声で電話がきます。

だれかに頼まなければ、文字で読むことができない。

「新潟教区 100 周年の祈り」は、点訳と音訳で準備ができています。
音訳（録音）は、土崎教会（秋田市）の音訳グループ、オリーブの実が担当しました。